

農芸ゼミナールでの試みと成果

早野 由美恵 | Yumie HAYANO

1. はじめに

大学本館東側の道路を隔てた所にある「畑」において本ゼミナールを担当し3年目となる。

24年度のシラバスに記載した本ゼミナールの「目的」は「身体性、意欲、自主性、社会性」の4つの力を自らの内から喚起し、体得する事。「土を耕し、生命を育てる」事を通して、自然を五感で感じ、自分が生きていること、自分が自然の一部であり、他の生命とつながりあっていることを実感する。そうした生命、自然の実感を基盤にしながら自己や芸術デザインについて考え、考えながら土を耕して自然と対話し、思考を深め、自己を確立して行くことを目的とする、とある。

「土を耕し、生命を育てる」ということは、教育の観点だけではなく、現実的な問題としても土壌、水、空気汚染などの環境の問題や昨今の社会情勢を考えると、自らの手で作物を育てることが必要となる時代である。

上記目的に従い、過去2年間の授業期末に提出させたポートフォリオの内容や、その時の学生の反応の感触、授業アンケート等から授業構成を改正し、概要に従い授業は行った。

大きな流れの「調べる」「決める」「育てる」「作る」「与え、受け取る喜びを知る」「感じる」「表す」「伝える」は昨年からの流れであり、具体的な授業の概要は後に記す。本年度が例年と異なった点は、授業の終盤において農芸授業報告展を行ったことである。

授業の概要は以下のとおりである。

A. 自然と接する。

人は他の生き物を食さなければ、生存を維持出来ない。現代はそれらの感謝を忘れ、自然への畏敬の念を忘れている。実際に畑をつくり、耕し、作物を育てることにより、大地を感じ、地球と通じ、生命の尊さや自然との共生の大切さを思い出す。

B. 育てる

自然環境、めぐり来る季節の中でその時期に適合し、育つ作物をで学び、実践することによって、生命を愛しみ育くむ事を知る。

C. 山形の風土、食の文化を知る。

作物を育てながら、先人たちの試行錯誤により風土に適した食が培われて来た。それらを調査し体感する。

そこで考えられた授業計画の流れは以下の通りである。

1. ガイダンス、アイスブレイク

2. 作付け会議

3. 畑を耕す

4～10. 作業とコミュニケーション

山形の食文化を研究

11. ミニ収穫祭

12～13. 作業とコミュニケーション

季節の「室礼」とテーブルコーディネート

14. 収穫、展示会準備

15. 収穫祭、展示会

2. 具体的な授業内容と取り組み

本ゼミナールは前述したように自然を相手にし、生命を育てる行為により、学生たちはそれではか得られないことを学ぶことが目的のひとつである。しかしそこから思考を深めるためには、言語力を養い自分の考えをまとめ、それを言葉で伝え、文章にして表す。ということも重要である。

そこで、毎回「農芸日誌」というタイトルで、行為と反省、計画と発見、気づきを認めたレポートの作成を行った。また、積極性や意欲性などの自己分析も期初と期末に行った。

教養ゼミナール 『農芸』 (事前調査)	
農芸クラス	担当教員：早野 由美恵
第1回	月 日 (火曜 1・2時間)
学科	氏名
■ 現在、あなたには、次の4つの力がどのくらい備わっていると思いますか。 該当するものに✓し、その数を枠内に記入しなさい。	
身体性	主体性
☐ 自分の中にエネルギーを感じる	☐ 自ら学ぼうとする姿勢がある
☐ いろいろな感覚を使って物事を感じている	☐ すぐ他人に頼らず、自ら判断し行動する
☐ 未知の世界に飛び込む勇氣がある	☐ 計画を立て、それを遂行できる
☐ 世界とのつながりを意識している	
意欲	社会性
☐ 未知の物事に対する好奇心がある	☐ 相手の意見を丁寧に聴くことができる
☐ 興味・関心をもとに行動を起こせる	☐ 自分の考えをわかりやすく伝えられる
☐ すぐにあきらめずに、粘り強く取り組む	☐ 自分の役割を理解し、協力できる
■ この授業でなにをしたいか？ なにを期待しているか？	
■ どんな野菜を作りたいか？	
トマト・ナス・ピーマン・トウガラシ・キュウリ・カボチャ・ズッキーニ・スイカ・メロン・ゴーヤ・オクラ ・スイートコーン・インゲン・エダマメ・ジャガイモ・サトイモ・その他[]	
■ どんな料理を作りたいか？	

〔図表1〕事前調査表

■ 現在、あなたには、次の4つの力がどのくらい備わっていると思いますか。 該当するものに✓し、その数を枠内に記入しなさい。	
身体性 2	主体性 3
☐ 自分の中にエネルギーを感じる	☐ 自ら学ぼうとする姿勢がある
☐ いろいろな感覚を使って物事を感じている	☐ すぐ他人に頼らず、自ら判断し行動する
☐ 未知の世界に飛び込む勇氣がある	☐ 計画を立て、それを遂行できる
☐ 世界とのつながりを意識している	
意欲 3	社会性 2
☐ 未知の物事に対する好奇心がある	☐ 相手の意見を丁寧に聴くことができる
☐ 興味・関心をもとに行動を起こせる	☐ 自分の考えをわかりやすく伝えられる
☐ すぐにあきらめずに、粘り強く取り組む	☐ 自分の役割を理解し、協力できる
■ この授業でなにをしたいか？ なにを期待しているか？	
今までは野菜について自然と触れ合うことが多かったのですが、自分で野菜をつくる達成感と収穫の喜びを感じたいです。また、収穫した野菜を料理して食べたいです。	
■ どんな野菜を作りたいか？	
トウモロコシ・ピーマン・トウガラシ・キュウリ・カボチャ・ズッキーニ・スイカ・メロン・ゴーヤ・オクラ ・スイートコーン・インゲン・エダマメ・ジャガイモ・サトイモ・その他[]	
■ どんな料理を作りたいか？	
ナスのトマト煮、キュウリの漬物、ズッキーニのソテー、2人分の野菜を合わせて料理を作りたいです。	

〔図表2〕事前調査表記入記入例

以下に具体的な授業内容を記す。

○1週目 ガイダンス、アイスブレイク

①授業計画、目的、概要を伝える

②クラス内全員の名前を覚えるワークショップを行う

③事前調査表の記入

④グループに別れ今後の作業に関して話し合いを行う

農芸の授業で何を期待するか。

畑で何(野菜、花 等)を育てるか。

②に記載した全員の名前を覚えるワークは、早野自身の行うワークショップでよく行いが、お互い名前を覚える事で距離が近づき、一度に何十人も覚えることによって自分自身に自信がつく事がとても多く、今回も同様の効果が得られた。

■ 今日の活動
今日は、最初にお互いの名前を覚えてもらいました。無理だと思っていましたが、早野先生のやり方で、すぐ覚えてしまいました。とても驚きます。何リタイ料理を話して、お礼を言おうと思います。

■ 今日の発見
今日は、早くから畑から野菜を覚えてもらって、とてもうれしいです。今日はトマトとしか覚えてはなかったけど、みんないろいろな野菜を知りました。私も、いつもより積極的になって話しかけられて、緊張もしたけれど会話をはずかしくありません。

■ 今日の反省
今日は、最初、教室をまわって、そして「きりぎり」だったので、これからしっかりと確認します。あと、しか話さず緊張感が伝わったので、話はもっとたくさん聞きたいです。

■ 次回の課題
今後、夏に収穫できる野菜を育ててくれる。
全員の名前を覚えておくようにする。

〔図表3〕農芸日誌記入例

○2週目 畑の土作り

①畑の土作り

②グループに別れ、来週から何を植え、育てるか討議

この授業は、教員の作成した計画通りには進まない。まずは天候によって作業の内容が変わる。次に農芸ゼミナール一斉に行う作業が急遽入ることがある。この日は同じ時間帯の農芸ゼミ全員で畑に肥料をまき、石を拾う作業を行った。

これからの暑さ対策、作業内容と畑で得たことの振り返り、経験などのシェアリング、次週の計画などを行うため、以降も1時間目は畑での作業を行い、2時間目は教室での作業というスタイルをとった。

○5週目 畑作業と振り返り

5週目、小雨の降る中、注文していた苗を植えておかないと次週では間に合わないため、作業に掛かる。効率的な分業の良さで素早く終わる。畑では一部のキュウリが枯れてしまっていた。その日の日誌には「農業の難しさや哀しさを味わった。」という感想が多かった。教室では、奇跡のリンゴ農家木村氏の映像を観る。宿題は山形の郷土料理のレポートを次週までに作成。

■ 今日の発見

傘を差す人、畠を歩く人、苗を植える人、マルチを押し回す人、敷いた土を平にする人、悪天候の中にも頑張って作業をしようとしている人。しかも丁寧！
木村耕助氏のリンゴ栽培の愛情と情熱を感じることができた。

■ 今日の反省

キュウリが枯れているのを見て、当分の時水が足りなかったのかなと気づいた。これからもしっかり観察しよう。

【図表9】農芸日誌記入例

○6週目 畑作業と振り返り、郷土食

①畑のメンテナンス

②郷土食の調査発表

山形の郷土で育まれた料理を各自調べ、レポートとする。それを各自発表する。

○7週目 畑作業と振り返り、生命について

①サツマ芋の苗を植える

②世界の飢餓、食肉、実験動物等の現状を探る

収穫、雑草抜きなどの行為、昆虫や両生類などの生物との接触で生命についての考えや疑問が生じて来た学生もいる。そこで、世界の持つ課題を投げかけた。

○8週目 畑作業と振り返り、収穫祭企画

①枝豆の植え替え

②畑のメンテナンス

③収穫祭の企画

農芸ゼミの中でも、この早野のゼミの特徴として、畑での作業を通じて得られること以外に、その収穫物でおもてなし料理を作る。ということがある。「おもてなし」というととても堅苦しい、手間のかかることと思っている学生も多かったが、本来は「相手のことを思いやる心」「モノをもって成し遂

山形県の郷土料理について

山形県の郷土料理をインターネットを用いて一通りの作り方をまとめた結果、山形県の郷土料理は精肉として、肉料理が少なく、野菜や山菜を用いた料理が多い。
・ 味付けは醤油、味噌、だし汁の3点を主に用いるものが多い。
・ という点に気が付いた。それはおそく歴史的な原因や土地柄が関係しているためなのではないかと考えた。
また、近隣の県の郷土料理と同じもの、似通ったもの、呼び名が違うだけのものなども数点見受けられた。ゆべし、稲え物、なます、しそ巻などは食べ方や調理法としての独特さを感じた。

山形県の主な郷土料理と一般的味付け（乾煎、揚平し、山菜の天ぷらなど調理法が全国的なものは一部省きました）

No.	料理名	味付け	特徴な食材	No.	料理名	味付け	特徴な食材
1	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	37	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
2	芋の揚げ物	揚げ油	芋、干し芋	38	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
3	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	39	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
4	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	40	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
5	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	41	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
6	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	42	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
7	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	43	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
8	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	44	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
9	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	45	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
10	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	46	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
11	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	47	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
12	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	48	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
13	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	49	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
14	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	50	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
15	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	51	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
16	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	52	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
17	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	53	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
18	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	54	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
19	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	55	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
20	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	56	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
21	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	57	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
22	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	58	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
23	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	59	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
24	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	60	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
25	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	61	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
26	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	62	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
27	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	63	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
28	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	64	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
29	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	65	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
30	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	66	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
31	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	67	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
32	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	68	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
33	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	69	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
34	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	70	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
35	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	71	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋
36	芋の煮物	醤油、味噌、だし汁	芋、干し芋	72	魚の煮物	醤油、味噌	魚、干し芋



【図表10】宿題の郷土料理の調査

げること」とある。つまり相手のことを思う心を、行動をもって表す。ということである。

そこで次のルールを作って、日々増える成長し実った野菜たちを皆で食べるということに加え、相手の為に、心を込めて作る。という行為によって得られる感覚を実際に体験、認識してもらうことや、食卓に彩りを添える重要性、日本の季節の室礼を経験することも目的とした。

ルール1：メインは畑での収穫野菜を使用する。

ルール2：6週目に調査した料理内容も活かし、色々に展開する。

ルール3：4グループA,B,C,Dに分かれ、それぞれ

A→B B→C C→D D→A

の為におもてなし料理を作る。

ルール4：他の必要食材は早野の方で準備するので、学生は自宅にある調味料などの負担のみとする。

ルール5：事前に相手のグループに好きな物、食べられない物（アレルギーの調査も含む）をリサーチする。



[写真4] 収穫物で作った「おもてなし料理」



[写真5] 収穫物で作った「おもてなし料理」

■ 今日の発見と感動

今日は収穫した野菜でおいしい料理を作った。自分の収穫した野菜が、みんなの笑顔につながることが、とても嬉しい。収穫した野菜が、みんなの笑顔につながることが、とても嬉しい。収穫した野菜が、みんなの笑顔につながることが、とても嬉しい。

[図表13] 農芸日誌記入例

教養ゼミナール農芸日誌（期末）

■ この授業を通して、つぎの4つの力がどのくらい身についたと思いますか。
該当するものにチェックし、その数を枠内に記入しなさい。

身体性 4	主体性 3
☐ 自分の中にエネルギーを感じる	☐ 自ら学ぶという姿勢がある
☐ いいアイデアを感じて物事を進めている	☐ すぐ他人に頼らず、自ら判断し行動する
☐ 未知の世界に飛び込む勇気がある	☐ 計画を立て、それを進行させる
☐ 世界とのつながりを感じている	

意欲 3	社会性 3
☐ 未知の物事に対する好奇心がある	☐ 相手の意見を丁寧に聴くことができる
☐ 興味・関心をもとに行動を起こせる	☐ 自分の考えをわかりやすく伝えられる
☐ すぐにあきらめず、粘り強く取り組む	☐ 自分の役割を理解し、協力できる

■ くに努力したことはありますか？
野菜をたくさん収穫することができました。野菜を収穫することが、とても楽しいです。収穫した野菜が、みんなの笑顔につながることが、とても嬉しい。

■ この授業を通して感じた自分の課題はありますか？
野菜の収穫量を増やすことが、課題です。野菜の収穫量を増やすことが、課題です。野菜の収穫量を増やすことが、課題です。

■ この授業で得た成果はありますか？ 今後どのように活かしていきたいですか？
野菜の収穫量を増やすことが、成果です。野菜の収穫量を増やすことが、成果です。野菜の収穫量を増やすことが、成果です。

[図表14] 期末調査票記入例

■ 自分のなかでこれからの課題

「収穫した野菜が、みんなの笑顔につながることが、とても嬉しい。」という言葉を、自分の作品や作文にも、自然と使いたいです。収穫した野菜が、みんなの笑顔につながることが、とても嬉しい。

[図表15] 農芸日誌記入例



[写真6] 収穫物

○15週目 畑作業と授業全体の振り返り

- ① 畑のメンテナンス
- ② 期末の調査票の記入
- ③ 農芸日誌記入とシェアリング

収穫物を全員で分け、調査票の記載と農芸日誌の記載。

3. 本授業を通じた学生の反応

3-1 出席率

全15週の授業日数における欠席数の集計を以下に示す。

欠席日数	学生数	割合
0日	13名	50%
1日	3名	11%
2日	2名	7%
3日	3名	11%
4日	3名	11%
11日	1名	3.8%
14日	1名	3.8%

[図表16] 欠席日数の集計

欠席の理由は13名の学生は体調不良であった。

欠席日数14日の学生は、再履修の学生であったが、理由は明らかではない。

3-2 期初と期末のアンケート結果より

自分に備わっている力の認識アンケート

		期初	期末	増減
身体性	0	1	0	-1
	1	7	3	-4
	2	10	5	-5
	3	3	8	+5
	4	3	6	+3
主体性	0	1	0	-1
	1	8	4	-4
	2	1	5	-7
	3	3	12	+9
意 欲	0	1	0	-1
	1	3	2	-1
	2	7	7	0
	3	13	13	0
社会性	0	2	1	-1
	1	6	3	-3
	2	12	10	-2
	3	4	8	+4

〔図表17〕 期末アンケートの結果

全体を通して期初に対して期末の方が備わっている力が多いと感じている学生が増えた傾向が見られる。

個別に見てみると、出席率との関係が見られた。

欠席が多日数の学生は備わっていると感じている力の数に変化のない学生が多かった。

また、増加と減少の数が同一でないのは、最終日に欠席した学生の回答を得られなかった為であるが、数字から判断すると、学生たちは、身体性、主体性、意欲、社会性に関して増加したと感じたが、特に身体性と主体性の増加が顕著であったと判断出来る。

3-3 毎週の農芸日誌と最終ポートフォリオから見えること

最終ポートフォリオは表紙を含め8枚以上とした。学生たちは授業中は畑での作業でも、室内でのワークでもそのものみ集中していたため、写真の撮影はティーチングアシスタントと教員の作業であった。最終日に撮りためた写真を

CDにして渡し、自分のレポートに適している写真を使用する事を許可した。

まとめ方は各人によって異なるが、以下に実際の記載文章からの抜粋を記す。

- a. 私は一人が好きだけれど、一人では生きていけない。
- b. 「平和」という言葉が前提のこの国だけど、なかなか「平和」という場面に会ってない気がしていました。でも農業をして自然に触れて「ああ平和なんだ」と心が思った気がした。
- c. 私が授業を通じて一番に学んだのは「命」の大切さだと思う。普通に暮らせることがどれだけありがたいことか。
- d. この授業で「生きること」について教えてもらいました。ひとが生きて行くということは他の命をいただくこと。
- e. このゼミはためになった。というより楽しかった。
- f. 学科内でも打ち解けてないのに、他学科のひとと話すなんて出来ない。と思っていたのにゼミ外でも普通に話していることが凄い。
- g. 命を育てて、生きるとはどういうことなのかと考えてみたくてこのゼミを受講した。
- h. コミュニケーションは相手の目を見ながら心を通わすこと。
- i. かわいかった。感動した。考えた。
- j. 食の大切さと、協力し合う大切さ。
- k. 農芸さぼろうかな、と魔が差したこともしばしばあったが、なんとか無欠席で終わることができた。高校の時サボりまくっていた私からしたらこれは凄い成長だ。
- l. 農業をなめていた。

4. 最後に

学生たちの思い思いに書いたポートフォリオには彼らの過ごした半年間が認められている。教員は苗や種の手配、学生たちの様子を注意し、体調や時間監理をしたのみだった。大地が、野菜が、小動物が、風や雨、太陽という自然が、そして彼ら自身が自分たちの心と身体を育んだように思う。楽しい事ばかりではなかった事も日誌から伺える。しかし、それらの摩擦により精神的にも感覚的にも身体的にも磨かれて来た事が、これらの資料から読み取ることができる。

最後にある学生のポートフォリオの一節を記す。

自然に生かされている人間

自然なくして人間は存在しない。だから私は野菜を収穫するとき、口には出さないがこころの中で野菜たちに「こここで育ててくれて『ありがとう。』生きるためにあなたの命をもらいます。『ごめんなさい』これからわたしの一部として『よろしくね』と語りかけるようにしている。逃げるクモにいつの間にか「バイバイ」と心の中で声をかけるようになっていた。

私たちは自然生かされている。自然は自分たちでやっていけるのに、私たち人間が生きることを許してくれている。そのように感じる。

人間がなぜ生きているのか、人間は地球にいてはいけないのではないか。この問いの答えはいくら考えても出て来なかった。おそらく、正解となるような、納得できる答えは見つからないのだと思う。しかし、これは生きている限り自らに問い続けなければならない問題だ。人間が自然を支配しているなどと愚かな考えを抱くことのないように。

この「農芸」は言葉で「いのちはたいせつ」「食べることは生命をいただくこと」と言って理解したつもりでいたのものを改めて考え、自分は「いのち」に対してどれだけ真剣に考えたことがあるのか、見つめ直すいい機会になった。

〔執筆者〕

早野 由美恵

Yumie HAYANO

デザイン工学部 プロダクトデザイン学科

Department of Product Design, School of Design
准教授

Associate Professor